

2040年を見据えたまちづくりの方向性と課題

地域からの“住みたい”“なりたい”まちの姿

- ・何でもありでなく、子どもが安心して出かけられるまち（町1A）
- ・たくさん子どもと元気な高齢者がつながるまち（相原B）
- ・人と人がふれあい、自然が豊かな大人になっても戻ってきたいまち（小山C）
- ・子どもは楽しい。高齢者は安全。住むなら相原（相原D）
- ・大人も子どもも居場所があるまち（小山F）
- ・地域の“輪”を強めて皆で子育てできるまち（高・成C）

- ・3世代で住みやすい働く場やコミュニティがあるまち（相原A）
- ・个性的なお店が存在でき、子どもも大人も楽しめるまち（町1A）
- ・良いとこ取りで心地よいまち（鶴川B）
- ・緑の中で人と人がつながるまち（鶴川C）
- ・人と人、自然が育む、豊かな町田市（鶴川D）
- ・コンパクトで循環型のまち（小山B）
- ・誰もがやりたいことができる人間味あまるまち（小山D）
- ・まちと人がうまく循環して、住んでいて”ちょうどいい”まち（高・成A）
- ・女性の生活を考えて、自然と都会の共存できる街（高・成C）

- ・多様な世代がマッチングできて関わり合えるまち。全体が大家族（町1B）
- ・愛着がもてるまち（町1C）
- ・バスの中で知らない人とも会話ができるまち（鶴川A）
- ・近所の人に怒られるまち（鶴川A）
- ・生涯を見守るまち（小山A）
- ・世代も地域もボーダレスなまち（小山C）
- ・昔と今と未来が見えて生活環境が整った小山町（小山E）
- ・人がつながり、自然が豊かで、みんなが安心して暮らせるまち（小山G）

まちづくりの方向性

- 子どもが育ちたいと思うようなまち
- 子どもがここで育ってよかったと思うまち
- 子どもを産み育てたいと思えるまち

日本全体で人口減少が進む中、自治体間競争による人口の奪い合いでは根本的な解決になりません。日本の希望出生率は「1.8」と言われていますが、町田市を含めて多くの自治体で希望が叶っていない状態です。少子化対策は国がすべきものという考えではなく、行政サービスを提供している基礎自治体としても子育ての希望を叶える取組ができるはず。町田市では、この問題に果敢に取組む先進的な自治体を目指すことを、まちづくりの方向性を考える起点として考えます。「子どもが育ちたいと思うようなまち、子どもが住んでよかったと思うまち、子どもを産み育てたいと思えるまち」が実現するためには、お互いを信頼できる社会や幸せを感じられる社会が必要だと考えられます。幸福感や信頼感の高い社会をつくることにより、出生数が増え、更にそこに人が集まり社会増にもつながります。

- 豊かな暮らしができるまち
- ちょうどいい楽しいまち
- 自分のライフにワクワクできるまち

AIやICTなどのテクノロジーの発展により仕事のあり方や仕事の仕方が大きく変わることが考えられます。仕事をする観点からは、町田市内で仕事をする価値を提供することにより、市内に働く場所を集積させるなど、多様な働き方を実現できます。今後、共働き世帯が当たり前となる状況も考えると、職住近接という生活圏に近いところで仕事ができることが大切になります。そして、仕事以外の時間である自分の時間への対応も必要です。まちにある緑に親しめる、地域で様々なイベントがある、誰かのために活動をする、そこへの交通アクセスが充実しているなど、暮らしを豊かに楽しくできるようなちょうどいい環境が多くの人を惹きつけます。町田市を、仕事や仕事以外の時間を楽しめ、ワクワクできるまちとすること。このことをまちづくりの方向性と考えます。

- まちがなんとなく家族のようなまち
- 人と人が手を取り合い地域をつくるまち
- 多様性を認め合えるまち

町田市においては、「まちだ〇ごと大作戦18-20」のような地域でつながりが生まれる取組が進み、実際、多くのつながりが誕生しています。人や地域のつながりは、子どもから大人まで多くの人を支えやすく包み込んでくれます。それは、つながりを苦手とする人に対しても、何かあったときには支え合いの中に迎えられるものであり、そうしたなんとなく家族のようなつながりが人口減少時代におけるまちの魅力の一つになることが考えられます。そして、地域の人各自が自分たちの地域に必要なことを一緒に考えて、地域資源の使い方を含めて地域をつくり続けることが、地域のつながりを一層強くすると考えられます。このような、なんとなく家族のような温かい人と人とのつながりが感じられる昔懐かしいまちの姿を目指し、継続させることをまちづくりの方向性と考えます。

2040年を見据えた課題

2040年に向けた課題

- 【社会の姿に関する課題】
- 新たな時代に求められる能力が身につく学習を、子どもから大人まで受けられる環境の整備。
- 同世代の子どもたちが一緒に学び遊び、地域ともかかわりが持てるまちをつくる
- まちと一緒に子育てをしてきているような環境をつくる
- 保護者から子どもへ愛情がたっぷりと注がれるように、保護者自体への支援を充実させる
- 性別や国籍、障害、認知症、年齢など多様な人々が、多様性という言葉で表されない、すべての人が個人として尊重される社会をつくる。
- 町田市が取り組んでいる子どもや認知症にやさしいまちづくりを多分野で展開する。
- 技術革新による利便性を誰もが享受できるように世代間のデジタル格差解消を進める。

- 【ライフスタイルに関する課題】
- 自分の時間を楽しむため、文化・芸術・スポーツを身近に親しめる環境を整備する。町田市にある文化・芸術やスポーツを楽しめる町田で暮らすライフスタイルをつくる。
- 人から品物を買う楽しさや、品物を選ぶ楽しさを感じられるように、買い物することができまるまちを維持する。
- 楽しめるイベントがまちで、中心市街地など都市の核となる場所で定期的に開催されていて、まちが動いている環境をつくる。
- 年齢や性別などに関わらず、自分の夢や希望、“したいこと”“ほしいこと”が多くの選択肢の中から“選ぶこと”“選ばないこと”ができるまちをつくる。こうした、40万人まるごと自己実現地域をつくる。
- 町田市内で仕事をするという価値を提供できるまちにする。
- ライフスタイルに合わせた住まいを選択できるまちにする。
- ライフステージに合わせて住まいを変える住まい方を広める。

- 【地域の姿の課題】
- 市内にある地区協議会や町内会・自治会など地域に住む様々な人が、助けあい、支え合う、地域コミュニティを継続させる。
- 地域とのつながりの強さ弱さを選ぶことができつつも、地域の中で誰も取り残されないようなコミュニティをつくる。
- 災害時に、住んでいる地域であることを問わず助け合いによって、災害対応や復旧、復興が進む町をつくる。

2040年に想像されるまちの姿

- <少子社会>
- ・人口減少に伴い、地域に子どもが少なくなる。（町田市将来人口推計）
- <超高齢社会>
- ・超高齢社会により、認知症高齢者が増加する。（「超高齢社会における東京のあり方懇談会」政策提言）
- ・人口減少による労働力不足の結果、これまで以上に外国人人材が増え、社会が多文化を受け入れる必要がある。（「未来の東京」への論点（東京都））
- ・高齢者のみ世帯や高齢者単独世帯の増加により老々介護や閉じこもり、孤独死などの社会問題が増加する恐れがある。（「超高齢社会における東京のあり方懇談会」政策提言）

- <技術革新>
- ・「Society5.0」の実現や「第4次産業革命」などにより、AIやICTなどのテクノロジーがさらなる発展を遂げる。（町田市基礎調査報告書）
- ・テクノロジーの発展により、利便性が高まり、買い物や移動など生活に関わる行動で、他者との関わりが極端に少なくなる可能性がある。生活利便性は高いが、孤独な社会になる恐れがある。（日経スタイル18年2月20日）
- ・外出して買い物しなくてもよくなるため、身近な商店や駅周辺の商業施設などの衰退の懸念がある。（日本経済新聞 19年9月23日）

- <子育て不安>
- フルタイムでの共働きが当たり前になり、少子化は進むが保育ニーズは高まり、ワンオペ育児など子育てに対する不安が残り続ける。（町田市を取り巻く社会経済状況の変化への対応）

- <働き方>
- ・時間や空間に縛られない働き方が日常になる。一方で、顔を合わせたコミュニケーションは重要になる。（スーパーメカリージョン構想検討会・最終とりまとめ）
- ・一定程度は、集まって仕事をするのが就業スタイルとして残る。（日経スタイル19年9月29日、日経クロステック19年9月30日）
- ・テクノロジーの発展や働き方改革により、生きるための糧を得る“仕事”へ費やす時間は減少し、“仕事”以外の時間が増加する。（日経産業新聞 19年9月20日、日本経済新聞17年8月7日、NTTD経営研究所調査）

- <気候変動による自然災害>
- ・地球温暖化による気候変動によって、自然災害は全国的に経験がないような激甚化をしている。町田市においても、首都直下型地震発生の可能性や、大規模台風による風水害に見舞われる可能性がある。（「未来の東京」への論点（東京都））

※「2040年に想像されるまちの姿」は、社会状況の変化のうち、主に「人口減少・少子高齢社会の到来」や「働き方改革・Society5.0に伴うビジネススタイル・ライフスタイルの多様化」、「第4次産業革命等に伴う産業構造の変化」を基に、作成されています。